

鏡山猛の大宰府都城論

大宰府史跡の発掘調査は昭和43(1968)年に開始されましたが、そのときに大宰府解明のバイブルとなつたのが、同年に発刊された鏡山猛の『大宰府都城の研究』(風間書房)でした。

鏡山の大宰府研究は九州帝国大学の卒業論文「西都条坊致」にはじまっています。それほど発掘調査の機会に恵まれていない時代に、鏡山は、現在まで遺っている大宰府政庁と観世音寺の配置を復原し、その範囲をそれぞれ方四町・方三町としました。次いで、筑前・筑後に残る条里遺構を検討し、条坊内の遺構と文献を対応させながら研究を進めています。その結果、大宰府に政庁南北

中軸線を境とする左右両郭があり、中軸北端に方四町の政庁が置かれ、東西十二坊、南北二十二条(可能性としては二十四条)からなる条坊制が、条里を利用しつつ施行されていたことを明らかにしました。これが卒業論文の骨子ですが、昭和12(1937)年に「大宰府の遺跡と条坊」として論文化され、大宰府研究の基礎となっています。

大宰府人物志

資料室だより ⑦

この成果に、大宰府条坊を取り囲む大野城・基肄城・水城などの遺構を調査するとともに、これらの実測図を作成し、大宰府都城の構造を解明したのが『大宰府都城の研究』でした。その刊行の半年後に大宰府の発掘調査が開始されたのですから、時宜を得たものでした。

鏡山は集落や墓地・水田など弥生時代の遺構の性格の解明に取り組み、宗像沖ノ島の調査研究を指導するなど、その功績は多岐にわたっています。人望が厚く、九州大学文学部に考古学研究室が開設されると、その初代教授を務めています。その退官の年に、九州歴史資料館が設置されると初代館長に就任しました。

発掘調査の成果は、細部で鏡山の研究を塗り替えていきましたが、それをもっとも喜んだのが自身でした。今、大宰府は歴史の故郷として、再生してきています。それを可能にした大宰府研究の原点が、鏡山猛にあることを、銘記したいものです。

公文書館構想調査研究委員会

副会長 高倉 洋彰